

3) 日赤産院分娩記録に見られた仮性半陰陽の 増加とその疫学的考察

野 末 源 一
(日赤医療センター)
北 村 益
(同)
佐 藤 妙
(同)
村 上 睦 子
(同)

日本赤十字社産院における奇形児発生割合は全分娩の0.4%から0.9%と1%以下で変動しているが、昭和30年から昭和36年までの間に発生した奇形児分娩を検索し、対照例と比較検討中、たまたま昭和32年より仮性半陰陽の症例が発生しはじめ、昭和34年には6例を示している事実が明らかとなった。

表1に示すように昭和32年から1例、33年1例、34年6例、36年3例と連続して発生し、女性偽半陰陽5例、男性偽半陰陽6例が発見されているが、性染色体検査は行なっていないので正確な判別は期待しがたい。

奇形中にしめる半陰陽児の割合は32年2.9%、33年4.3%、34年12.5%、36年11.1%であり、32年より36年を通じて7.0%になっている。

全国の泌尿器奇形による乳幼児死亡数をみると、昭和32年より36年までの5年間では75例で男児47例(63%)になっており、昭和37年から41年までの5年間では103例で、男児64例(62%)である。一般に乳幼児死亡中男児のしめる割合は57%であり、先天異常児死亡中でも55%水準であるから男児の超過が認められる。この10年間における泌尿器奇形発生数は昭和32年以前の発生数に比して2倍近くになっている。

この時期において、某製薬会社よりエストロゲン・プロゲステロン混合製剤として注射

剤が、昭和31年12月、錠剤として昭和34年6月に発売されており、発売後ただちに妊娠初期における妊娠診断法として使用され、妊娠の継続には差支えないとして使われた。

外国文献によれば、プロゲステロンは、動物の胎仔には男性化作用はないという報告もあるが(Skchowsky & Junkmann 1961)、ヒトでは、男性化作用(Grumbach et al. 1959)があることがほぼ認められている。また、エストロゲンは、雄のラットの性器形成障害作用を持つことが認められている。(Johnson & Franklin 1964)

ホルモン剤妊娠初期投与によってこのような性器異常の連続発生があったと考えられ、その他の因子について詳細な検討の上、より明確な関連性を見出すべく検討中である。

表1 日赤病院における半陰陽児発生

年 度	分娩数 (1)	奇形児数 (2)	半陰陽 数 (3)	(3)/(2)
昭和30年	4306	25(0.58%)	0	—
31	4950	25(0.51%)	0	—
32	4330	34(0.79%)	1	2.9%
33	4641	23(0.50%)	1	4.3%
34	4920	48(0.98%)	6	12.5%
35	5081	26(0.51%)	0	—
36	5035	27(0.54%)	3	11.1%

(37年以降は検索中)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



日本赤十字社産院における奇形児発生割合は全分娩の0.4%から0.9%と1%以下で変動しているが、昭和30年から昭和36年までの間に発生した奇形児分娩を検索し、対照例と比較検討中、たまたま昭和32年より仮性半陰陽の症例が発生しはじめ、昭和34年には6例を示している事実が明らかとなった。

表1に示すように昭和32年から1例、33年1例、34年6例、36年3例と連続して発生し、女性偽半陰陽5例、男性偽半陰陽6例が発見されているが、性染色体検索は行なっていないので正確な判別は期待しがたい。

奇形中にしめる半陰陽児の割合は32年2.9%、33年4.3%、34年12.5%、36年11.1%であり、32年より36年を通じて7.0%になっている。